



# 線路が紡ぐ物語

鉄道記念物・準鉄道記念物の18史

写真・文＝原田伸一

鉄道記念物は、歴史ある鉄道財産を後世に残すために日本国有鉄道が1958年に設けた制度である。JR北海道ではこれを引き継ぎ、2010年北海道鉄道130周年を機に新たな指定を加え、記念物は4点に準記念物は14点となった。いずれも北海道の鉄道発展に功績があった動力車や施設ばかり。それらが登場した時代背景をたどりながら、果たした役割などを紹介する。

## 第①回 【しづか号(鉄道記念物)】

吉野山 峰の白雪 ふみわけて  
入りにし人の あとぞ恋しき

これは源平時代の悲劇の武将、源義経の側室、静御前が別離を強いられた義経への追慕の念を詠んだ歌だ。義経は家来の弁慶とともに兄頼朝の追っ手に囲まれ、自害したとされるが、蝦夷地(今の北海道)に渡って生き延びた、という伝説がある。もし、それを耳にしたら静御前も蝦夷に行こうとしただろうか。

実はそれから約七〇〇年後、二人は蒸気機関車に姿を変えて、手宮(現・小樽市内)で再会したのだった。「義経」号と「しづか」号である。

一八八〇年(明治十三)、米国ポーター社製の蒸気機関車二台が手宮に陸揚げされ、一台は「義経」、別の一台は「弁慶」と名づけられた。前部にはカウキャッチャー(牛除け器)を付け、煙突はダイヤモンド形。西部劇でお馴染みのスタイルだ。

その後、同形の三台が輸入され、全部男性の名前がつけられたが、一八八五年、六台目が到着した際、「義経」がいるなら「しづか」を添えてやりたい、とだれかが粋な計らいを



磨き上げられ、誇らしげな「しづか」

「男勝り」の役割を担った。豪雪で「義経」が動けなくなったとき「しづか」が助けに行った、というほほえましい逸話もある。

「しづか」はその後、日本製鋼所室蘭工場に譲渡され、一九五二年(昭和二十七年)まで働いた。さらに原形に復元され、現在は思い出の地、手宮の小樽市総合博物館の一階しづかホールで、時の流れに身を任せている。黒光りするボイラー、牧歌的な金色のベル、ランプ式の前照灯など、手入れがすべて行き届き、今にも走り出すような趣だ。

一方の「義経」は現在、大阪・交通科学博物館で、こちらも原形を保って展示されている。二台はこれまで四回、イベントなどで対面を果たしてきた。そこで

したのだろう。伝説はこのとき真実となった。  
このころすでに、米国人クロフォードの指導により、幌内鉄道が手宮から札幌を経て幌内炭山(現・三笠市内)まで開通していた。富国強兵の掛け声の下、「しづか」も石炭など豊富な資源を中央に送り出す、  
気になる次のランデブー。「しづか」は昨年十月、準鉄道記念物から鉄道記念物に昇格したが、「義経」がそれを祝ってくれる舞台を作れないものだろうか。どちらも照れるかな。●